

野鳥たより

—北海道—

第 2 3 号

編集者 北海道野鳥愛護会

発行者 北海道国土緑化推進委員会

発行日 昭和51年3月21日



クマガラの♂ 江別市野幌森林公園で 昭和50年4月29日 撮影 梅木賢俊 (10ページ参照)

サロベツの身近かな鳥たち

富士元 寿彦

開発か自然保護かで随分と論議された道北・サロベツ原野については、まだ脳裏に新しいことだが、原野とその周辺で比較的普通に姿や鳴き声を確認できる鳥たちを思いつくままに紹介してみたい。

まず、私が生まれ育った幌延町栄の沢では、昔と比べるとすっかり丸坊主の山になってしまったものの、現在でも各種の野鳥が多く、初夏になると朝まだ暗いうちから夜遅くまでツツドリ、カッコウ、エブセンニューなどが競い合うようにやかましいほどに鳴いては私を楽しませてくれる。

また、時が前後してしまっただが、雪解けのころにはミソサザイがいち早く囀り出し、日に日に暖かくなって山の地肌が増してくるに従い、夏鳥の数が急に目立ち始めムクドリ、コムクドリ、ウゲイス、キジバト、アオジ、アカハラ、キビタキ、ホオアカ、モズ、アリスイ、ハクセキレイ、ベニマシコ、オオジシギなどが盛んに囀り、巣作りを始める。

春早くに通過して行くものにジョウビタキ、ツグミがあり、毎春、家の横に生えているスモモの木に止まって休息する姿が見られる。

沢沿いにある灌木雑木林などではヤマシギが昼間休んでいて、夕方、薄暗くなるとあの独特のシルエットで上空を飛びながら、繁殖期にはグッ、グッ、ピッという鳴き声を出す。この鳴き声を知る人は多いだろうが、この

ほかにもヤマシギがチー、チーという細いけれども割に良く聞こえる声で鳴くのを知っているであろうか？時期としては6月から8月ごろに限られているので、ヒナと若い個体の鳴き声なのかも知れないが……。

昨年（昭和49年）の7月から8月にかけて、家から100メートルほど離れた所にある牧場の湿地でヒメクイナが繁殖し、毎日あのクイナ独特の声が聞こえていた。今年（昭和50年）も聞けるものと楽しみにしていたが、残念ながら聞くことができずガッカリした次第である。

今年は例年に比べ、アオバトとベニマシコの数が多かったが、ヨタカが少なく「馬追い鳥」の別名で親しまれてきただけにどうも寂しい気がする。

このほかに栄の沢で見ることのできるものを挙げてみると、スズメ、カラスはもちろん、ニューナイスズメ、トビ、ノスリ、シジュウカラ、ハシブトガラ、コガラ、ゴジュウカラ、エナガ、アカゲラ、オオアカゲラ、ヤマゲラ、コゲラ、シメ、カケスなどが繁殖し、時折り採餌のため飛来するものではアマツバメ、ハリオアマツバメ、オオタカ、チゴハヤブサ、フクロウを挙げるができる。

少し足をのばして原野へ出向けば、ノビタキ、シマアオジ、ノゴマ、ヒバリ、コヨシキリが盛んに囀り、道路からそれほど離れていない小川や沼ではマガモ、カルガモ、カイツブリ、アカエリカイツブリ、バンが普通に営



サロベツ・パンケ沼に憩うヒシクイの群 1973年5月1日

巣していて、時期さえ良ければ可愛いヒナを連れて泳ぐものと出会う。

原野にあるペンケ・パンケ両沼と、それをつないで流れるサロベツ川のよどみでは春秋の二回、渡りガモが餌をあさり、休息している。他に春先には雪解けの水がオンナイベツ川を越えて、牧場が小さな沼のようになる所が何箇所もあり、その所有者には気の毒だが、まさにカモの楽園といった具合いで、時にはヒシクイやハクチョウ、アオサギが降りていることもある。

サロベツの水面が所々あき始めると、いち早く姿を現わすのがミコアイサで、数羽の小群になって氷の間を潜っては小魚を捕食しているのが見られる。ほとんどのミコアイサは他の渡りガモとともに北方へ帰ってしまうが、一部のものは稚咲内の保安林に点在する小沼等で繁殖している。また、同一環境ではキンクロハジロも繁殖している。

晩秋になると、猛禽類の移動が見られ、北方からチョウゲンボウ、コチョウゲンボウ、コミミズク、トラフズクなどが原野を横断する姿の外、厳寒期（というよりも降雪による餌の不足のためと考えられる）を避け、ノスリ、トビ、ツミ、ハイタカ、オオコノハズクなども南方へ移動してしまい、降雪後は北方からの珍客であるケアシノスリ、シロハヤブサ、シロフクロウやハヤブサ、オジロワシが獲物を狩るために飛ぶ姿を、原野や海沿いで時折り見られるだけになってしまう。

冬の原野は荒涼としたもので、カラスでさえも原野を横切る数が減り、寒々と感じられるほどである。稀に人家付近へ迷ってでも来るのかユキホオジロ、ハギマシコ、シラガホオジロなどが飛来した記録はあるものの、それは大変に珍しいケースだといえる。

しかし、この殺風景だった原野にも、雪が消え始めると、南方へ去っていた各種の野鳥たちが次第にもどり出し、やがて咲き乱れる草花とともに活気を与えてくれるのである。

(天塩郡幌延町)



ヒナに餌を運ぶノビタキの♂ 1973年6月



巣穴で待つヒナのため餌を運ぶ
アカゲラの♂ 1975年7月5日



樹枝上で獲物を待つハイタカ 1973年6月



ノスリ 豊富町で 1974年9月12日

道東野鳥観察記

野村 聡

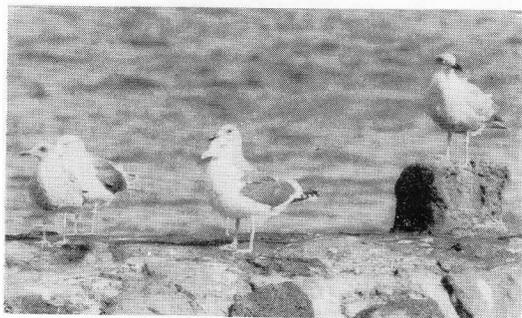
昭和50年1月4日から6日間の日程で私達は道東の野鳥を観察した。以下は同行者の入江君、高橋君と共にまとめた観察記である。

1月5日(晴)オホーツク海岸はさすがに身を切るような風が吹いていた。私達はその寒さの中でしばらく海を見ていたが、突然波間に数種の鳥からなる集団が目の前に現われた。私達は寒さもわすれて観察をはじめた。

エトピリカ、ピロードキンクロ、ミコアイサ、ハシジロアビ、クロガモの5種からなっていた。その一群の横には、ウミネコ、オオセグロカモメ、セグロカモメからなる集団もあった。その他ここで私達が記録した鳥はスズメ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、シジュウカラ、コガラであった。

1月7日(金)尾岱沼白鳥台にて。私達は白鳥台の岸にはりつめた氷の上を歩いて白鳥に近づくことにした。氷はかなり厚いようだった。私達は細心の注意をはらっておよそ3,000羽のオオハクチョウに近づいていった。その途中でオオハクチョウの死骸を見た。成鳥で、腐敗もせず原型のまま凍りついていた。さらに近づいていくと、大群のあたり一面に犬の糞大のオオハクチョウの糞が散在していた。午前8時、腰をおちつけてオオハクチョウの群行動を観察しはじめた。早朝のせいか群全体としての活動はあまり活発なものではなかった。大群の平穏さを打ち破るように突然その中の小群の1羽が沖の方へ飛び発ち、他のものも一斉に飛びたった。私達は少し接近し過ぎたようであった。大群の中にはこのような小群が私達の近くに4つ、沖に2つあつまって海を中心にドーナツ形に集まっている。その中央の海では、ホオジロガモとコオリガモが観察された。

1月4日(曇)厚岸湾にて。堤防にのぼると5メートル程下にセグロカモメがのんびり羽根を休めている。私達は海の方へおりてみることにした。沖にはカモの群が



オオセグロカモメの成鳥と若鳥

漂っている。ピロードキンクロ、クロガモ、ホオジロガモ、コオリガモ、シノリガモ、ミコアイサ。

シノリガモは、私達の2メートル程前を恐れもせず泳ぎ過ぎていった。私達は楽しくなってしまった。

1月9日(くもり後晴)釧路タンチョウの里にて。私達の旅も最終日。3人とも疲労をかくしきれなくなって来た。しかしタンチョウだけはどうしても見て帰りたかったので「タンチョウの里」にでかけた。私達がテレビ、写真などで見て知っているタンチョウは、広々とした真っ白な雪原で自由に舞い遊んでいる姿だが、ここは人間達があまり近づけないようにと、板の囲いがしてあり狭苦しい感じがした。餌づけをしているから、タンチョウがとても観光客や望遠レンズに慣れているのにはびっくりしてしまった。それらは確かに美しい舞いを私達に見せてくれたし、優美な姿ではあったが、保護の中で育っているものは、どことなく自然の荒々しさ、力強さに乏しいような気がしたのは私達だけだったろうか。

帰りの道でキクイタダキを観察した。まるで小さく、地味な鳥だが、生きる力強さではち切れそうな姿であった。

今回の観察旅行で私達が驚いたことは、見かけ上では、鳥が人間になれているということと、人間の鳥を観察する態度が悪いということであった。私達自身にも観察者に相応しくない幾つかの不用意な点があった。反省することにして。

(北海道立小樽桜陽高校2年)

<ブックコーナー>

最近、鳥について書かれた本が相次いで出版されているので、その一部を紹介します。

「別冊アトリエ 鳥の描き方」680円 アトリエ出版社。

「野鳥の生態と観察」1,500円 「野鳥の生活」850円

「謎の巨鳥モア」850円 いずれも築地書館。

「ロビンの生活」1,200円 「セグロカモメの世界」1,800円 「ダーウィンフィンチ」1,800円 「進化ガンカモ類の多様な世界」1,400円 いずれも思索社。

「キタタキ 生きていた幻の鳥」1,700円西日本新聞社。

「雪国のスズメ」980円 「鳥ってこんなもの」650円 いずれも誠文堂新光社。

「日本の白鳥」18,000円 善隣。

「鳥の歌の科学」1,200円 中央公論社。

「瓢湖 白鳥物語」1,000円 三省堂。

「ふくしまの野鳥」680円 福島中央テレビ。

うちのお客さん

さとう 実

この写真は去年、江別市の大麻からうちのお客さんを見にきた、若い鳥仲間が撮って送ってくれたものです。このアカゲラ君は、餌台を初めて出した4年前から、季節になるとごぶさたのないお客さんで、♂2、♀2が毎日替る替るきています。

カスリのウエアを着て、赤いベレー帽子をかぶった♂の姿はちょっとダンディでないでしょうか。

餌の脂が食べやすいように、とまり木として横木を打ちつけてやっているのですが、彼らはこれにとまって脂をつつくことはめったにありません。尾がこのような体を支えていないと、落着きがないのかもしれないね。この横木にとまって脂をつつくのはカケスです。体の大きな彼が本気をつつくと柱がゆれます。網をくい切るときもあります。シジュウカラもとまりますが、脂の上ののっかってつづく方が多いようです。ヒヨドリもとまってつづきますが、どうもあまり嬉しそうではありません。ツグミはとまりません。おれの食べるものでないと思っているのでしょうか、きっと。

このごろよく来るシメもとまったのですが、脂はつづきませんでした。ひもじくとも食べない態度は、高楊子



脂をつつくアカゲラの♂ 1975年3月30日

さむらいに似ていましょうか。彼はリンゴが好きなので台所の窓のすぐそばにある餌台にリンゴの芯をおいておくと、ゆっくり時間をかけてすっかり食べてゆきま。前号「夏鳥の初認」の中にこのシメもならんでいますが、雪のさ中にうちのお客さんになっているのは、どうした季節違いなのでしょう。

いま、うちのお客さんの花形は、なんといってもコウライキジです。♂4つと♀6つですが、たまに台所の下のうら庭のキジ場（うちではそういっているのです。）に、この10羽が揃うときがあるのですが、まるでニワトリを飼っているみたいです。

去年からウソがきていますが、アカゲラの♂がミスターさとう鳥園とすれば、これは準ミスターということになりましょうか。（札幌市西岡 51. 2. 26記）

給餌台の仲間たち

新宮 康生

猫のひたいほどの我が家の庭は全体が野鳥の食堂といったところである。肩をくっつけ合う木々の枝にはいたる所リンゴ、脂身、トウキビがぶら下り、雪囲いの竹の先には、食パンの耳が、これまたスズメ達が何処にとりつこうかと迷うほどの数である。本物の餌台もあるにはあるのだが、これよりは木の枝や竹の方が見ていてずうっと面白い。人間の楽しみのために鳥達には申し訳ないが……こちらも餌集めにかげずり廻ったりして、それなりに苦勞はするのだから、その辺はカンベンしてもらっている。

今年のニューフェイスはアトリで、多い時には40羽位お出でになる。彼等には別に変ったしぐさはないが、胸のオレンジ色が大変に美しい。堅いトウキビを丹念につづいている。

1羽のツグミはもういつてから3ヶ月ほどになるが終日リンゴから離れない。時たまパンや脂身をデザートとしてとっているが、どうも人間とは反対のようだ。一

番おっとりしているのがシメで、人が通ったり、ネコが現われたりすると他の鳥はいちはやく逃げるのに、シメだけは残り「何だ、何だ、」というようにキョロキョロあたりを見廻して、こちらがヒヤヒヤすることもあるほどだ。ズングリ型は動作が鈍いのかも知れない。

何といっても可愛いのはシジュウカラ——キッチンとネクタイを締め、いつも5.6羽でやって来る。その動作の愛らしさは見ていてあきることを知らない。また美しい声も聞かせてくれる。

声も衣装もあまり美しくはないヒヨドリも常連で4.5羽いるが、中に1羽ぐんと小さい子供らしいのがいる。これは人が近寄っても仲々逃げない。妻はこれが可愛いくてたまらないと言う。多分、自分も小さいからだろう。

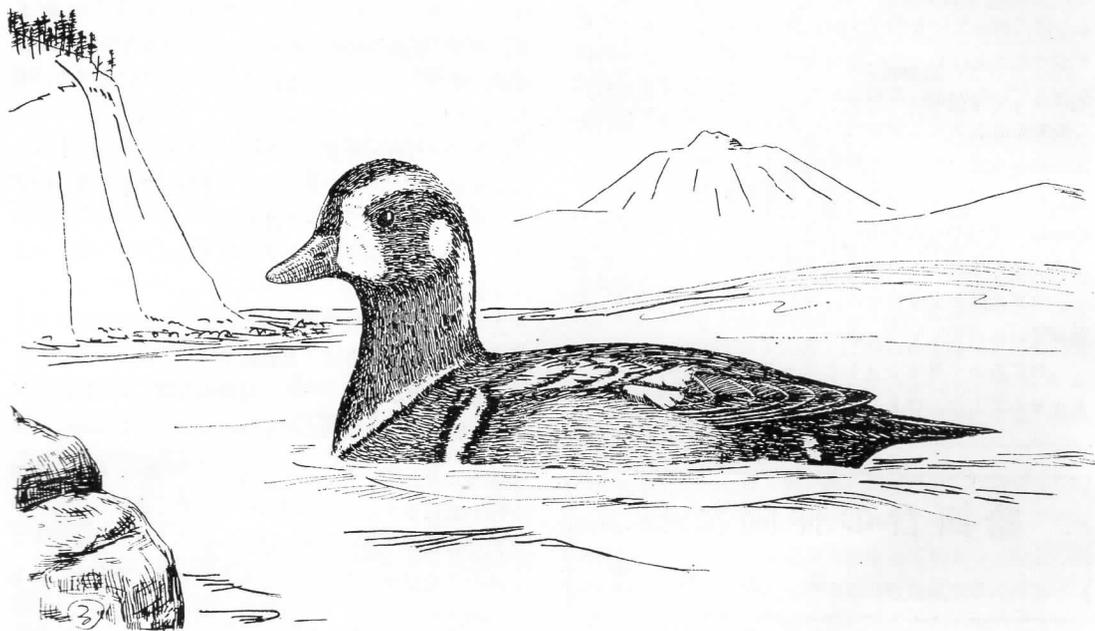
今年はまた、ドバトがチョコチョコお出でになる。どういう訳か、ハトが来ると他の鳥達が逃げてしまうので、ついこちらはハトを追う羽目になる。彼等は、ハトを仲間だとは思っていないのだろうか？

ともあれ今年の冬も種々と楽しませてもらっているが、いまだにレンジャク姿を見ないのが何とも寂しい。毎日、首を長くして待っているのだから、せめて帰り道にでも立寄ってほしいと願うこと切である。

（札幌市・本会幹事 51. 2. 25記）

鳥の紳士録 >シノリガモ<

百 武 充 (絵と文)



冬、札幌から小樽まで列車に乗ると、張碓から朝里あたりの海でたくさんのシノリガモが見える。いまはスピードの速い電車が多いのでなかなかゆっくりとは眺められないが、以前蒸気機関車のひく列車があったころには車窓からオスの美しい羽色を楽しむこともできたものだ。

シノリガモは内水面には入らず、主として外海の荒波の打寄せる磯浜にいますので、一般にはあまりなじみ深い鳥ではない。しかし数は比較的多く、毎年全国一せいにこなわられている水鳥の調査では道内から2千~3千羽が数えられている。生息場所の関係で調査もれが多いことを考えると、実数はその何倍にもなるであろう。それでも世界的に減少の傾向が強く、わが国でも数年前に狩猟鳥から除かれた。大群をつくらず、ふつう数羽の群でいるが、知床半島の小さな入江の岩の近くで百羽ほどの群

を観察したことがある。

繁殖地は北極圏の周辺で、千島、サハリンでも営巣する。日本には冬鳥として北海道と東北地方の沿岸に渡ってくるが、道内の離島などでは夏もしばしば記録があり、北海道で繁殖する可能性がないわけではない。巣は溪流や滝の傍につくるといふから、知床半島あたりでどうであろうか。

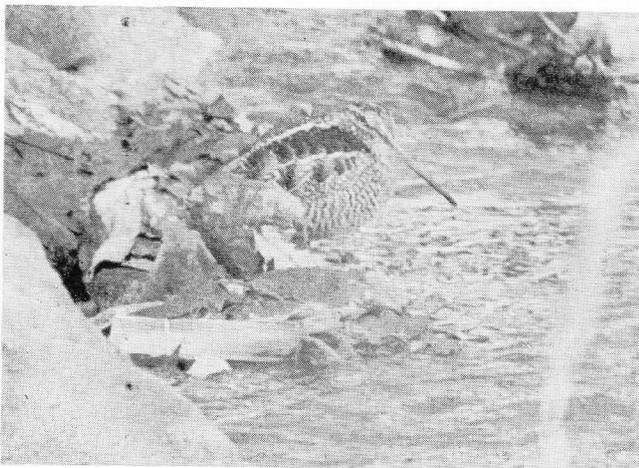
英名のハリクィンは道化師の意で、顔の白い斑点の感じから。和名は函館郊外の地名、志苔にちなむものであろう。コシャマインの乱ゆかりの志苔館のあったところである。志苔はアイヌ語のシラリ(平磯の意)の転じたものだから、偶然とはいえ、このカモの習性にぴったりの名であるといえよう。

(弟子屈町・本会参与)

ア オ シ ギ

羽 田 恭 子

今冬（50年～51年）は、ベニヒワ、ハギマシコ、イスカを見ましたが、ギンザンマシコはまだです。今日は見れないかしらと円山神社境内を歩きました。ベニヒワ20羽の群は♂3、♀17で、どう見てもアンバランスです。ギンザンマシコには会えず、帰宅するとすぐ電話のベル。平井さんの第一声で「ああ、やっと通じたわ（そのはずです。8時半に動物歳時記の鳥の放送を聞いて、すぐ家を出たのですから）。朝から何度もかけて、もうあきらめて家にもどったけれど、種不明のシギがいたので見てほしかったの」とのこと。「何処に」、「宮の森」、「私



アオシギ 札幌市中央区宮の森 1976年3月 萩 千賀

が見ても分からないでしょうけれど、見たいですね」、「では、すぐ行ってみましょう」と。

図鑑と双眼鏡をつかんで飛び出し、平井さんの車に乗らせていただく。車の中で「どんな場所」、「溪流の中」と、会話を交わす。さて、山間の溪流の中にあるシギというのを、何かの本で読んだ記憶があるのに、それがどの本で何シギだったか、いくら考えても思い出せず我ながらもどかしい。

着いて小さな流れの中を見ると、いるいる。確かに見たことのないシギです。タシギやオオジシギのように単純な色合いではありません。少し遠い。プロミナーがほしい。また平井さんの車でプロミナーを取りに家にもどって、今度はプロミナーでのぞく。何と素敵な色合い、まわりの石と一語になって、保護色といえば保護色ですが、何とも深味のある羽色です。それよりも種を調べねばと図鑑をめくり「アオシギ」ということになりました。冬鳥として山間の溪流にいるが数は多くない、とあり、場所もびったりです。

2時間ものぞいたでしょうが、水の中に入ると脚は水

中で黄色味を増して見え、陸にあるかと緑褐色に見えます。長い嘴は先が黒く、根元が灰黒色に見え、嘴の先には、今にも落ちそうで落ちない水滴が光っています。カラスがこんな状態だったら、ヨダレと思ったのですが、初めての鳥に興奮して水滴も真珠の玉に見えます。

腹の横縞が密できれいです。時々、まばたきをするのがとても可愛く、私にウインクしてくれていると勝手なことを考えながら、飽かずながめました。羽色は何と表現してよいか分かりませんが、とても深味のある色合いで、さんざん和服を着尽くした人が最後に着るオシャレな着物、洗くってちょっぴり粋な袖（つむぎ）、そんな感じです。尾の先の栗色がなかなかいかすのです。

午前中「赤い鳥、赤い鳥」とギンザンマシコの赤を求めていたのに、あれは派手なだけ、このアオシギのなん

とすばらしい羽色よと彼か彼女か知らないけれど、すっかり惚れこんでしまいました。

122 万都市札幌、しかも中央区にアオシギの住む場所があるとは何とすばらしいことではありませんか。まわりの木立は二次林ですが自然が残されています。しかし、ある日、突然にあの流れにヒューム管が通され、その上をブルドーザーが唸

れば、一日でアオシギの安住の地は失われます。どうかそのようなことのないようにと、願わずにはいられません。

（札幌市・本会幹事）

青 鳴 唱

平 井 さ ち 子

鳴の看経嘴の一滴凍りそう
だんまり鳴の脚下明かるき雪解澤
漁り鳴にかけすの節介雪降らす
嘴が生む水輪はぬるめ孤り鳴
日脚伸ぶされど夕濃し青鳴に

さらば勇払湖沼群

小山 政 弘

自分だけが自然保護論者であるかのように、御高説を語るインテリ達とは違い、挫折感と絶望感に傷心し、涙流しながらまもなく姿を見せなくなる野鳥を観察する者もいる。

昭和49年10月10日、写真家の長井博氏と弁天沼にでかけた。苦東工業港の着工前に、今の沼の姿を記録しておくという考えであった。

周囲3km程のいかにも小さな沼だが、火山灰地の沼特有の澄んだ水には、ウトナイ・丹治沼同様天然のワカサギが生息している。

海岸に近い沼だから、生息する野鳥の種類も豊かで楽しい。その日も、アジサシやミサゴが終日みごとな停空飛翔を見せてくれたし、対岸のマヌケハンター達を一蔑して私たちの頭上をウトナイ方向に過ぎていく3羽の懐しいマガンの姿も見ることができた。

資本家が金もうけのために工業開発を進め、うなる金の力に物いわせて原野や山林を買いあさるのは、今や常識的な姿だし、そんな気狂い連中だから、勇払湖沼群が渡り鳥にとって欠かせない地帯であろうがなかりうがどうでもよいことだし、むしろこんな土地を「遊ばして」おくのがもったいない、と考えるのも彼等の狂った頭では当然のことなのだ。

だが、私たちの役所が、文化程度の低いそんな資本家連中とさ程変わらないことを知った日には、私はもう「自然保護」だなんて美辞麗句は使えなくなってしまった。弁天沼周辺の土地には、北海道企業局名入りの立入禁止の立札があちこちに立てられていた。まさか、工業地帯

化の将来のために自然環境を残そうという気の効いた道有地ではあるまい。

「野鳥だより」13号の「窓」は、ウトナイ湖の保全を切々と説いている。私には、この執筆者の今にもなき出しそうな顔が目浮かんでならなかった。金森(1967)によれば、約300年前のいわゆる古ウトナイ湖は、現ウトナイ湖の約6倍であったという。地形の経年変化で、今の大きさにまで縮ったのだらうが、こんどこそは、いよいよ溜池になるんだらうと考えてみれば胸が苦しくなる。

昭和50年度の国の予算で、道では支笏湖モラップ付近に「野鳥の森」を作る計画らしいが、この地帯は国立公園で、野鳥の生活もさ程苦しくはない。もしも道庁が行政の専門家ならば、勇払全域とまではいわぬまでも、せめてウトナイ湖一帯を永久保存の鳥獣保護区にして、渡り鳥観察ステーションを設置するくらいは考えられる筈だ。お役所は、ハンで押したような「青少年ナントカ村」だとか「ナントカの森」は作ることはできても、今消えようとする自然環境は救えないらしい。だから私は、早々と勇払湖沼群に別れを告げることにする。記念の撮影をしておこう。

今年1月のウトナイ湖。悲しい程に美しい老オオワシの姿、8羽のオジロワシ、数百羽のオオハクチョウやカモの群。みんなみんな記念撮影をしておこう。ひどく情緒的で、科学的であるべき本来の野鳥観察者にはまるで似合わないことだが、向う岸には沢山の工場が煙をモクモク出してもうすぐ攻め入ってくるのだから。「さようなら、勇払湖沼群」
(恵庭市立恵庭中学校)

探鳥会の記録

湧洞沼で探鳥会

藤巻裕蔵

10月26日(1975年)に十勝の湧洞沼で、秋の渡り鳥を見る探鳥会が行われました。この探鳥会は上士幌町教育委員会とひがし大雪博物館の共催によるもので、参加者は上士幌町と帯広市の小学生から大人まで約60名でした。なお愛護会の会員では川辺百樹さんと私の2名が参加しました。

この日はよく晴れ、風もなく鳥を観察するには絶好の天気でした。水鳥類は数多くいましたが、沼は広くあちこちにちらばっていて、それほど多いようには見えませんでした。

沼の北側中央のヨシ原にはヒシクイの群がおり、ときどき飛びたっては、参加者をたのしませてくれました。その数は約110羽でした。

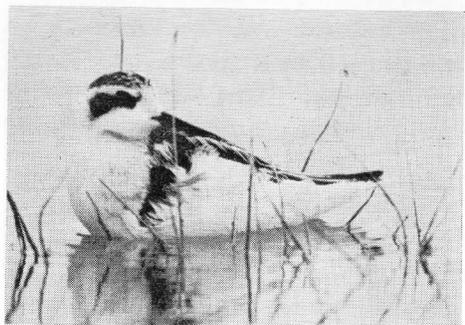
このほかのガンカモ類では、ヒドリガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ、カワアイサが見られました。このほか、ユリカモメ、オオバン、ハジロカイツブリがおり、札幌付近のウトナイ沼と比べると、オオバンやハジロカイツブリが多いようです。

水鳥類以外では、チュウヒ、トビ、ハクセモレイ、カワラヒワ、ヒガラが観察されました。(帯広畜産大学)

鷓川探鳥会 萩千賀

明け方ごろ激しい雨の音に目がさめた。今日は探鳥会の幹事であった。雨が降っても現地に行くつもりであったので、あわてることはない。羽田さんも然り。鷓川の駅に2人は降りたが、さすがに明け方の強烈な雨に、皆ちゅうちょしたのだろう。誰も降りてこない。「これは2人だけの探鳥会ね」とニヤニヤして、いつもの探鳥地にむかった。時折、小雨にみまわれたが、まあまあのお日和であった。

河口部に行こうと思って牧柵沿いを歩いてると、目の前の小さな水溜りに、なにか鳥が1羽いて、水の中をクルクル回りながら急がしそうに採餌を始めた。それは冬羽のアカエリヒレアシシギであった。そのシギは、これより前に、海岸の方へ出ようと思っていた浅瀬で、2人で同時に見て、アカエリかハイロカを確認しそこなったヒレアシシギであった。2人はホッとした。



アカエリヒレアシシギ 50・10・5

50年10月5日 9:30~14:00 曇りときどき小雨

〔担当幹事〕羽田恭子・萩千賀

〔見れた鳥〕1. シメ 2. カワラヒワ 3. ツバメ 4. ハクセキレイ 5. トビ 6. ムクドリ 7. アジサシ 8. ビンズイ 9. アオアシシギ⑤ 10. ダイゼン⑩ 11. オオソリハシシギ⑫ 12. イソシギ① 13. キリアイ② 14. ソリハシシギ① 15. ハマシギ⑬ 16. トウネン② 17. オグロシギ⑦ 18. メダイチドリ① 19. キアシシギ② 20. ツルシギ① 21. タシギ② 22. キョウジョギ① 23. アカエリヒレアシシギ① 24. ユリカモメ 25. ウミネコ 26. スズガモ 27. コガモ 28. オオジュリン 29. アオサギ 30. マガモ 31. オナガガモ 32. ハヤブサ 33. ヒバリ 34. スズメ 35. ハシボソガラス 35種類(シギ・チドリは数を記入)

藤の沢探鳥会 平井さち子

すでに恒例となった札幌市南区藤の沢「白鳥園」の探鳥会ですが、給餌場に集まる野鳥を室内からゆっくり観

察できるため、他の探鳥会に比べ、参加者は子供さんから年配の方までバラエティーに富んでいるようです。「藤の沢小鳥の村」の名誉村長で、愛護会の幹事でもあり、また当日の担当幹事である小沢さんの話では、今年初めてアトリが餌場についたということで、数十羽のアトリが、まるでスズメのように群がって餌をついばんでいました。

11時30分ごろから約1時間をかけて、標高317mの藤野マナスル探鳥登山を行いました。23名の多数の方が元気に登頂しましたが、折悪しく雪が降り出したため、早々のうちに下山しました。昨年は、頂上近くのトドマツの梢で、ギンザンマシコが見られたのに、と思うとチョピリ残念でした。

それでも、再び給餌場にもどった所で、気の早いヤマガラの囀りを聞くことができました。

51年2月8日 10:00~14:00 晴れ一時雪

〔担当幹事〕小沢広記・平井さち子

〔見れた鳥〕1. アカゲラ 2. カケス 3. シジュウカラ 4. ハシボソガラ 5. スズメ 6. ヒヨドリ 7. エナガ 8. アトリ 9. ハイタカ 10. ハシボソガラス 11. ヤマガラ 12. コウライキジ 13. コガラ (?) 13種類

〔参加者〕佐々木勇、佐々木トク、白沢昌彦、岡田幹夫、小野寺敬子、野村梧郎、梅木賢俊、久保久、添田潤助、亀尾紋十郎、佐藤登代子、佐藤聖子、佐藤博之、横山喜代、横山雅子、横山マサ、小堀煌治、田原富子、新宮康生、新宮八枝、雨宮光枝、北市仁、野口正男、早瀬広司、早瀬富、羽田恭子、柳沢信雄、柳沢千代子、平井さち子、萩千賀、溝部泰子、井上元則、河野利明

野幌森林公園探鳥会 柳沢信雄

当日はくもりであったが、風もなく穏やか。いつもに比べ、やや種類が少なく群も小さかったが、飛びながらあるいは止まって鳴くクマゲラの声を十分聞くことができた(姿は見れず)。

大沢園地では、エゾライチョウをゆっくり見ることができた。

51年2月22日 9:00~14:00 天候 くもり

〔担当幹事〕柳沢信雄

〔見れた鳥〕1. ツグミ 2. ハシボソガラス 3. ハシボソガラ 4. カケス 5. ヒヨドリ 6. オオアカゲラ 7. コゲラ 8. エナガ 9. アカゲラ 10. ヒガラ 11. エゾライチョウ 12. キクイタダキ 13. ウソ 14. ヤマガラ 15. ゴジュウカラ 16. トビ 17. シジュウカラ 18. クマゲラ 18種類

〔参加者〕井上元則、新宮康生、新宮八枝、羽田恭子、早瀬広司、早瀬富、土屋倫作、土田純一、村野紀雄、平井さち子、小林清勇、柳沢信雄、柳沢千代

クマゲラの住める森に

柳 沢 信 雄

野幌森林公園は野鳥の種数も羽数も多く、一年を通して探鳥を楽しむ場所として最高によい所です。

いろいろな野鳥の観察ができるのですが、中でも私はクマゲラに特に興味を持っております。

ケラ達の中で一番大きい体をしており、黒一色の地味な羽色ですが、その容姿は気品に溢れていますし、嘴と眼の回りの金色が印象的です。特に雄の頭上の鮮かな赤は色みごとです。普段は森の中で静かに餌をとっていることが多いのですが、ひとたび声を出す時は、森中に響き渡る力強い男性的な声です。それに飛ぶ時のコロコロコロのリズミカルな鳴き声など、文句なしにひきつけられてしまうのです。

ですから、私は探鳥の度にクマゲラに出会うことを願って出かけてきました。

ところが、つい数年前までは、なかなかクマゲラに会うことは出来なかったものです。森林の奥深く、ひっそりと生活をしている様子で、探鳥に出かけても姿をみられることは稀なことでした。遠くから聞える鳴き声を耳にし「ああいるんだなあ、元気なようだ」と満足していたものです。

そのうちに、なんとか姿をみることは出来ないものかと考えて、探鳥の記録を取り出し、今までにクマゲラのみられた季節と場所を重ねて、その季節と場所において探鳥を続けてきました。運よく姿をみる事が出来た時などは、他の鳥達のことを忘れてしまうほどに満たされた気持になったものです。

このように見ることの少なかったクマゲラですが、近ごろはよく見られるようになってきました。

これは、ここ12年の急な変わり方です。それも一年を通して見られるようになりました。しかも公園の中でも利用度の高い(人出の多い)所に飛んできて餌をとっているのが眼につきます。開拓記念館近くとか、瑞穂の池の回り、大沢園地付近などです。

これは、クマゲラの個体数がふえて、悪条件の場所をなわばりにしなければならぬ個体がでてきたのか、あるいは人に慣れて、好い採餌場所であれば、人などかまわずに飛んで来るようになったと考えて喜ぶべきことなのかと、とまどいを感じております。

今年の冬は大沢園地近くの桂コースと四季美コースの外側の立枯木での採餌が特に眼につきます。ここはもう森林のはずれになるのですが、クマゲラ達はこの先どちらに向けて進むつもりなのでしょう。

もう一度野幌森林公園の奥にもどってくれるものなのか、それとも住みよい別の森林を求めて、遠くへ旅してしまうものか、今そのことが心配でなりません。

クマゲラ達の行動の変化には次のようなことも考えられます。

一つは、野幌森林公園の奥深い所には風倒木や立枯木が極端に少なくなったのではないかとことです。林内に足を入れていませんのではっきりしたことはわかりませんが、遊歩道からみる限りでもその心配が感じられます。

二つめは、風倒木、立枯木を処理した時、長時間、異様な騒音におびやかされたので、クマゲラ達が身の危険を感じて森林のはずれまで逃げ出して来てしまったのではないかと思われることです。作業が終わったあとは、いつもクマゲラ達のみられる場所が大きく移動し、一定の地域に落ちつくまでには相当の期間がかかったように思われました。

野幌森林公園は営林署と公園の両方が関係しているようですが、風倒木や立枯木の処理に当たっては、ただきれいに処分するという考え方でなく、この公園に住みついている数多くの動植物への心ずかいを最大限にとり入れ、作業にも細心の注意をお願いしたいものです。また公園の利用については、一人でも多く利用させようとするのではなく、野幌森林公園が持つ豊かな自然をいつまでも保ち続ける方向と、この豊かな自然にひかれておとずれる利用者が、漸次増してくれるのを待つように心がけていただきたいものです。

このような受け入れの姿勢ができたとき、入園者のマナーも一段と向上するのではないのでしょうか。

利用者の増加が公園の自然を大きく破壊している現状をみると、今すぐ抜本的対策が必要なことを痛感されてなりません。公園と営林署が一緒になって、次にあげることだけでも、すぐに実行にうつしていただけないものでしょうか。

- 1 風倒木、立枯木の処理は今後数年は行わない。
- 2 監視員の乗り物は自転車にする。
- 3 利用者の遊歩道と遊園地利用を固く守らせる。
一たけのこ、山菜、きのこ、昆虫など一切の採集を
厳禁する一
- 4 自転車道を指定する。
一林縁の遊歩道程度にする一
- 5 騒音をともなう集団や、ゲームを目的に来る団体のコースや場所を指定する。

クマゲラ達の追いつめられたような姿をみて、もう手遅れかと不安ですが、せめて今すぐ、この五項目だけでも実行していただきたいと願っています。

(札幌市・本会幹事)

第二次調査探鳥会の試み

小 川 巖

はじめに

会誌で何度かお知らせしてきた通り（第13号、17号）「札幌周辺の鳥を記録する会」を組織し、野鳥愛護会の会員が中心となって活動してきたことをご記憶の方も多いかと思います。

昨年は私の個人的な理由から日程のやりくりがつかず休止のやむなきに至りましたが、今シーズンに復活してみることにしました。ただ人員も回数も限られている中で、従来のように数ヶ所の調査地を設定して調査するだけでは、当初からの目的である鳥類相と環境変化との対応関係を把握するのは困難であることから、今年度は次の要領で実施することを考えています。これまで参加された方々はもとより、広く会員諸氏の参加を呼びかけると共に、この調査探鳥会に対する積極的な提言と助言をお願いする次第です。

メッシュ法の試み

メッシュ法の「メッシュ」とは「網の目」を意味します。つまり一定区域を縦横等間隔に線引きすることによって仕切られた区画がメッシュであり、その区画内における対象物の存在様式、状態を図示する方法がメッシュ法と呼ばれるものです。この方法は土地利用、集落分布動植物の分布状態などあらゆる分野で用いられています。一定区域内の諸傾向を直截的につかむのにはきわめて有効な手法とされています。

精度を高めるにはメッシュを細かく区切ればよく、逆に精度はいく分低くなっても大体の傾向が知ればよい場合には、メッシュを大まかに区切ればよい訳で、調査条件に応じて決められるという利点もっています。一方、すべて面的には一様にとらえるため、環境の質的な差位が無視されてしまうという欠点もあります。

鳥類相調査への応用

この方法は鳥類相の調査にぜひ利用されています。

東京都内におけるツバメの分布図などはその典型的な例で、本会誌第22号の「北海道のモズ類分布図」も不完全ながらこれに含まれます。かなりの数の調査者ないし

は協力者があってはじめて出来る仕事なのは申すまでもありません。

札幌およびその周辺の場合（5万分の1地図「札幌」に限定しても）、メッシュの数は少なく見積っても十数個、場合によっては数十個が必要になります。と言うよりは、調査者の規模に応じてメッシュの数が自ら決まってしまうとあえず私が考えた「実施要項」はおおよそ次の通りです。

- 1) 調査に当る人1名につき1ヶ所あるいは数ヶ所の定められたメッシュ（区域）を受持ってもらう。
- 2) 担当のメッシュには、出来れば何回か出向いて記録をとってもらう。
- 3) 期間は5～7月の繁殖期とする。
- 4) 記録に当っては何種類かの鳥類を重点的に取上げ適宜その他の鳥も記録する。
- 5) 5月下旬～7月の休日を利用して、郊外あるいは種類数の多い地域で全員が集まる調査探鳥会を数回程度実施する。

以上があらましですが、実施に至るまでにさらに検討を加える必要があります。

一人でも多くの参加を

自分の趣味、興味を充足させる手段として組織を利用することは大いに結構なことだと思う。しかし、自己の趣味で満足するにとどまらず、今日直面している問題に微力ながらも取り組むことは、自然を対象とした組織にとってもっとも大切な今日的使命ではないかと思えます。本来こういったテーマを、本会のような組織が積極的に取り上げるべきであろうが、その体制が全く来ていない現状にあっては志を同じくした会員が中心となつてまずは実施すべきと考え、再度提起する次第です。調査の性質上、調査に当たる人数が多ければ多いほど精度が上がります。参加して下さる方、関心のある方からのご連絡をお待ちしております。

〈連絡先〉060 札幌市北区北9条西9丁目

北大農学部応用動物学教室 TEL (711) — 2 1 1 1
内 線 2 4 9 1

(北海道大学農学部大学院生・本会幹事)

「初認記録」を 寄せてください

地面から雪が消え失せると同時に、夏鳥の便りが聞かれるようになります。日頃親しんでいるフィールドに訪ずれる夏鳥の初認の記録をとって、その結果を寄せて下さい。道内各地からたくさんの記録が集まれば、渡りの推移が分ることもあります。本年度は準備できませんでしたが、どうしてもこれだけはという鳥のリストを作成し、それについて全道一斉に調べるというプランもあります。とりあえず今シーズンは次の鳥に重点域において注意してみてもどうでしょうか。もちろん余裕があればそれ以外の鳥の記録もぜひどうぞ。

オオジシギ、ジュウイチ、カッコウ、ツツドリ、ヨタカアリスイ、ヒバリ、ビンズイモズ、アカモズ、ノゴマ、コルリ、ノビタキ、クロツグミ、アカハラ、ウグイス、センドタイムシクイ、キビタキ、ホオアカ、シマアオジ、アオジ、オオジュリン、コムクドリ。



(1 C 05のカラーバンドを付けたオオハクチョウ
1976年1月16日 尾岱沼春別川河口で 撮影 萩 千賀)

カラーバンドの効果あがる

1974・1975の両年に日本とソ連でカラーバンドを付けられたハクチョウ類は、コハクチョウ4羽、オオハクチョウ5羽の計9羽です。この中から、放鳥後に本道で観察されたケースを紹介します。

〔オオハクチョウ〕1 C 09緑：75年3月23日青森県平内町小湊で放鳥。75年12月8日～16日まで弟子屈町屈斜路湖で観察され、75年12月20日には小湊で観察された。1 C 05緑：75年3月23日小湊で放鳥。76年1月4日～18日まで別海町尾岱沼で観察、76年1月27日小湊で観察された。

〔編集後記〕

☆ 新妻さん：毎回、編集室の幹旋から新企画の提案、原稿依頼など、処理能力優秀。よろずに鑑賞力旺盛、賛辞を惜しまぬ代り批判もズバズバ。リーダーとして抜群。

☆ 梅木さん：23号の編集会議を予定していた矢先にあの道庁爆破事件。でも風呂敷包みに原稿類をしっかりと抱いて、道庁12階からにこやかに姿を見せたときは真実ほっとした。「野鳥だより」の心臓部健在。

☆ 小川さん：21号に敏腕をふるった藤巻編集幹事転勤のあとを受けて、手ずれのリュックを肩に颯爽と登場。忽ちエネルギーに行動開始。乞御期待。

☆ さて、私：上記3幹事のお茶くみでも、と加わったもの飲まず食わずの大車輪。改めて創刊号よりの編集者の力闘に感謝。がんばらなくっちゃ。

(平井記)

◇ ◇ ◇ ◇
☆ 何かしら、ホッとした心持ちです。まったくの素人が手をかけるのですから、とんでもないミスがあったかもしれません。とても編集などとは申せません。今までに、たくさん滞留していた原稿を整理した、といえば叱られるかもしれませんが、結果としては、そうなってしまいました。

☆ 整理とは、交通整理ということで、この中には貴重な原稿がたくさんありました。それなのに発表の時期を失したものがあったかもしれません。申し訳のないことです。

☆ 本来、この種のものハッキリと編集方針を樹ててかかるのが当然のことです。それを行い得なかったことを残念に思います。本誌は会員のための、会員による「野鳥だより」であるべきですし、あるべきでした。このことを銘記して、お詫びとします。

(新妻記)